

[A年] 棕櫚の主日(2021年3月28日)**【入堂行列・聖書日課】**

ゼカリヤ書9章9～10節

マタイによる福音書21章1～11節

【旧約聖書日課】 哀歌5章15～22節

- 15 わたしたちの心は楽しむことを忘れ
踊りは喪の嘆きが変わった。
- 16 冠は頭から落ちた。
いかに災いなことか。
わたしたちは罪を犯したのだ。
- 17 それゆえ、心は病み
この有様に目はかすんでゆく。
- 18 シオンの山は荒れ果て、狐がそこに行く。
- 19 主よ、あなたはとこしえにいまし
代々に続く御座にいます方。
- 20 なぜ、いつまでもわたしたちを忘れ
果てしなく見捨てておかれるのですか。
- 21 主よ、御もとに立ち帰らせてください
わたしたちは立ち帰ります。
わたしたちの日々を新しくして
昔のようにしてください。
- 22 あなたは激しく憤り
わたしたちをまったく見捨てられました。

【使徒書日課】

コリントの信徒への手紙一1章18～25節

- 18 十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。19それは、こう書いてあるからです。
「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、
賢い者の賢さを意味のないものにする。」
- 20 知恵のある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたではないか。21世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっていません。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。22ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、23わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、24ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。
- 25 神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。

【福音書日課】 マタイによる福音書27章32～56節

32 兵士たちは出て行くと、シモンという名前のキレネ人に出会ったので、イエスの十字架を無理に担がせた。33そして、ゴルゴタという所、すなわち「されこうべの場所」に着くと、34苦いものを混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはなめただけで、飲もうとされなかった。35彼らはイエスを十字架につけると、くじを引いてその服を分け合い、36そこに座って見張りをしていた。37イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げた。38折から、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右にもう一人は左に、十字架につけられていた。39そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって、40言った。「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」41同じように、祭司長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエスを侮辱して言った。42「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。43神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言っていたのだから。」44一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。

45 さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。46三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。47そこに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「この人はエリヤを呼んでいる」と言う者もいた。48そのうちの一人が、すぐに走り寄り、海綿を取って酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けて、イエスに飲ませようとした。49ほかの人々は、「待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、見てみよう」と言った。50しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。51そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、52墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。53そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた。54百人隊長と一緒にイエスの見張りをしていた人たちは、地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れ、「本当に、この人は神の子だった」と言った。55またそこでは、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。56その中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子らの母がいた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

哀歌5章15～22節

- 15 私たちの心から喜びは消え
踊りは喪の嘆きに変わった。
- 16 冠は私たちの頭から落ちた。
何という災いだ。
私たちは罪を犯したのだ。
- 17 そのために私たちの心は痛み
このために目は暗くなった。
- 18 荒れ果てたシオンの山を
ジャッカルがうろついている。
- 19 主よ、あなたこそ、とこしえに座する方。
あなたの御座は代々に続きます。
- 20 なぜ、いつまでも私たちを思い出さず
これほど長く捨てておかれるのですか。
- 21 主よ、私たちを御もとに立ち帰らせてください。
私たちは立ち帰りたのです。
- 私たちの日々を新しくし
昔のようにしてください。
- 22 それとも、あなたは私たちをどこまでも退け
激しい怒りのうちにおられるのでしょうか。

コリントの信徒への手紙一1章18～25節

- 18 十字架の言葉は、滅びゆく者には愚かなもの
ですが、私たち救われる者には神の力です。19それは、
こう書いてあるからです。
- 「私は知恵ある者の知恵を滅ぼし、
悟りのある者〔別訳→賢者〕の悟りを退ける。」
- 20 知恵のある者はどこにいる。学者はどこにいる。
この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かな
ものにされたではありませんか。21世は神の知
恵を示されていながら〔直訳→神の知恵の内にあ
って〕、知恵によって神を認めるには至らなかった
ので、神は、宣教という愚かな手段〔直訳→宣
教の愚かさ〕によって信じる者を救おうと、お考
えになりました。22ユダヤ人はしるしを求め、ギリ
シア人は知恵を探しますが、23私たちは、十字架に
つけられたキリストを宣べ伝えます。すなわち、
ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚か
なものですが、24ユダヤ人であろうがギリシア人
であろうが、召された者には、神の力、神の知恵
であるキリストを宣べ伝えているのです。25なぜ
なら、神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人
よりも強いからです。

マタイによる福音書27章32～56節

32 兵士たちは出て行くと、シモンという名前の
キレネ人に出会ったので、この人を徴用し、イエ
スの十字架を担がせた。33そして、ゴルゴタとい
う所、すなわち「されこうべの場所」に着くと、34胆
汁〔別訳→苦いもの〕を混ぜたぶどう酒を飲ませ
ようとしたが、イエスはなめただけで、飲もうと
されなかった。35彼らはイエスを十字架につける
と、くじを引いてその衣を分け合い、36そこに座
って見張りをしていた。37イエスの頭の上には、「こ
れはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書
きを掲げた。38同時に、イエスと一緒に二人の強盗
が、一人は右にもう一人は左に、十字架につけら
れた。39そこを通りかかった人々は、頭を振りなが
らイエスを罵って、40言った。「神殿を壊し、三日
で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そ
して十字架から降りて来い。」41同じように、祭司
長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエ
スを侮辱して言った。42「他人は救ったのに、自分
は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架か
ら降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。43彼
は神に頼ってきた。お望みならば、神が今、救
ってくださるように。『私は神の子だ』と言ってい
たのだから。」44一緒に十字架につけられた強盗た
ちも、同じようにイエスを罵った。

45さて、昼の十二時から全地は暗くなり、三時に
及んだ。46三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エ
リ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが
神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」
という意味である。47そこに立っていた何人かが、
これを聞いて、「この人はエリヤを呼んでいる」
と言った。48するとすぐ、そのうちの一人が走り寄
り、海綿を取って酢〔ワインビネガー〕を含ませ、
葦の棒に付けて、イエスに飲ませた。49ほかの人々
は、「待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、
見てみよう」と言った。50しかし、イエスは再び大
声で叫び、息を引き取られた。51その時、神殿の垂
れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起
こり、岩が裂け、52墓が開いて、眠りに就いていた多
くの聖なる者たちの体が生き返った。53そして、イ
エスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、
多くの人に現れた。54百人隊長と一緒にイエス
の見張りをしていた人たちは、地震やいろいろの
出来事を見て、非常に恐れ、「まことに、この人
は神の子だった」と言った。55またそこでは、大勢
の女たちが遠くから見守っていた。イエスに仕
えてガリラヤから従って来た女たちであった。56そ
の中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの
母マリア、ゼベダイの子らの母がいた。

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・3月28日「棕櫚の主日」の日課主題は「十字架への道」。「受難節(四旬節・レント)最後の主日は、日本のプロテスタント教会では英語圏の呼称「Palm Sunday」に従って「棕櫚の主日」と呼ばれているが、カトリック教会では「枝の主日」と呼び、また近年は「受難の主日」と呼ぶ。この日からの一週を「受難週(聖週間)」と呼び、福音書の伝える「受難物語」に沿って主イエスのエルサレム入城から十字架上の死と葬りまでを記念し、翌主日の「復活日(復活の主日・イースター)」に備える。この週の中でも木曜日から土曜日にかけては「聖なる三日」とも呼ばれ、各日は「洗足木曜日」「受難日」などの呼称、あるいは「聖木曜日」「聖金曜日」「聖土曜日」などの呼称で呼ばれる。

・「棕櫚の主日」は、四福音書が共通して伝える「エルサレム入城」を記念する主日として位置づけられているが、その記念の仕方は、伝統的に、通常の主日礼拝(主日ミサ)の導入部の「入堂行進」を拡大することで行われてきた。すなわち、伝統的な典礼形式では、礼拝(ミサ)冒頭に奉仕者による「十字架の入堂行進」が行われ、聖壇に十字架が掲げられるが、この行進を「棕櫚の主日」の礼拝(ミサ)では、礼拝堂(聖堂)外に奉仕者と会衆が集合して始め、十字架を捧持する奉仕者に続いて会衆はシュロの枝を振りながら礼拝堂周囲を行列して行進し、十字架捧持者から順に礼拝堂(聖堂)に入堂することで、主イエスのエルサレム入城の出来事を象徴的に記念する。この際に歌われる「棕櫚の行進」に即した讃美歌が多く作られてきた。また、このとき用いられたシュロの枝は、翌年の「灰の水曜日」まで保管されて、当日に燃やされ、「灰の式」のために用いるという習慣がある。

・この日の聖書日課は、通常の主日聖書日課のほかに、「棕櫚の行進」に際して朗読されるための箇所(通常は、ゼカリヤ書からの一節、および、いずれかの福音書のエルサレム入城の記事)が提示される。通常の聖書日課は、受難週の週日に記念することに先立って、主の十字架刑に関する記事が福音書日課として設定される。

入堂行列の聖書日課(ゼカリヤ9章、マタイ21章)

・「ゼカリヤ書」の当該箇所は、各福音書で伝えられる「エルサレム入城」の逸話で主イエスがロバに乗られたとされることの象徴的意味を「預言」として示すもの。おそらく、主イエスは、この「ゼカリヤ書」の預言に基づいて、預言者の象徴行為の一環としてエルサレム入城に際して意図的にロバを用いられたのである。

・「マタイ福音書」が伝える「エルサレム入城」伝承は、他の福音書が引用しない「ゼカリヤ書」の預言を明示して、この出来事を「預言の実現」というマタイ特有の神学的表現で伝えている。

旧約日課(哀歌5章より)

・「哀歌」は、エルサレム陥落とバビロン捕囚にまつわる悲嘆を歌うヘブライ語アルファベット詩歌集で、ユダヤ教正典においては「諸書」に分類されるが、「エレミヤの哀歌」として伝承され、「ギリシア語訳旧約聖書(七十人訳)」において「エレミヤ書」に続くものと位置づけられていたため、キリスト教会で用いる「旧約聖書」では「エレミヤ書」に付帯する詩歌集のように扱われている。各章が一編の詩となっており、アルファベット22文字に対応して、各章は22節またはその倍数の節数となっている。ただし、5章はアルファベット詩の形式が崩されている。これらは、「詩編」と共に、神殿祭儀における典礼式文として整えられたものと考えられている。

・日課箇所は、「哀歌」の第五の詩歌の終結部である。共同体の破壊された現実の中で自分たちの罪を認め、神に立ち帰ることを願う悔い改めの訴えで終わる。このような嘆きの詩は、典礼における「罪の告白・悔い改め」に用いられたため、詩歌自体に「赦しの宣言」や「救い」は必ずしも示されない。しかし、信仰書として解釈される中では、「嘆き」そのものに焦点を当てて、人が罪人として神の御前に嘆き訴えることの意味を問う文書として受けとめられてきた。

使徒書日課(Ⅰコリ1章より)

・「コリントの信徒への手紙一」は、使徒パウロが自らの開拓伝道によって創設したコリントの教会(使徒18章参照)に宛てて、パウロが去った後の教会で起こっていた混乱に対する助言を示すと共に、パウロの指導者としての立場を否定しようとするグループに対して自分の使徒としての立場を弁明するために記された。日課箇所は、パウロが中心的に教えていた「十字架の言葉」と称される事柄に対して、別の考えを持つグループが異議を唱えていることを踏まえて、教会論的視点から正当性を示すために記された。

・この箇所で、パウロが「十字架の言葉」や「十字架につけられたキリスト」という表現で「十字架」を強調していることから、パウロの神学を「十字架の神学」と呼ぶことがある。確かにパウロにとって「十字架」は福音の主要な要素であり、宣教において不可欠な内容であるが、それで完結しているわけではない。本書簡も、冒頭のこの箇所では「十字架」が取り上げられているが、本書簡で「十字架」の語が現れるのはこの箇所を含む1:13から2:8までの範囲での6例のみである。一方、本書簡の最終盤(15章)では「復活」が重要な議論の焦点になっており、「復活顕現伝承」を「最も大切なこととしてわたしが…伝えた」(15:3)こととして確認している。パウロの「十字架」の用例は、他の書簡でも限定的で、「ガラテヤ書」で7例があるほかは、「ローマ書」「Ⅱコリント書」「エフェソ書」「フィリピ書」「コロサイ書」で各1~2例が見られるのみである。

福音書日課(マタイ 27 章より)

・日課箇所は、主イエスの「受難物語」の中でも、裁判を終えた後、刑場まで十字架を担いで歩かされ、十字架につけられ、息絶えるまでの場面を描くクライマックスである。この場面を、「マタイ福音書」はほぼ「マルコ福音書」と同様に伝えるが、「ルカ福音書」は大きな補足と省略を加えている。また「ヨハネ福音書」は、異なる伝承(おそらく使徒ヨハネに由来する伝承)に基づいて物語を進行させている。

・主イエスが刑場まで十字架を担いで行く道筋は、「聖地エルサレム」において「ヴィア・ドロローサ(苦難の道)」として記念され、その道程中に 14 の「留」と呼ばれる記念碑が設けられている。それらは、四福音書から再現された情景描写に基づくものであるが、実際には福音書がこの場面を詳細に描いているわけではない。むしろ、「共観福音書」は、その刑場までの道程で、たまたま居合わせた「キレネ人シモン」が主イエスに代わって十字架を担がせられたことを伝えることだけに徹している(「ヨハネ福音書」だけは、この人物を登場させず、主イエスご自身が十字架を担ぎ上げられたと伝えている)。この人物は、「マルコ福音書」が敢えてその二人の息子の名「アレクサンドロとルフォス」を明示しているように、おそらく家族そろって初代教会に加わった人物である(「ルフォス」と同一人物らしき名は「ローマ書」16:13 に記されている)。これは、たまたまシモンが負ったことであつたかもしれないが、他の弟子(使徒)たちは、主イエスが一回目の受難予告に際して、「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(16:24)と告げられたことを知っており、シモンの十字架担ぎを象徴的出来事として解釈したはずである。

・主イエスの十字架死の場面で「マタイ福音書」が独自に伝えるのは、息を引き取られたときに、神殿の幕が裂けるだけでなく、地震が起こり、墓が開き、「聖なる者たち」の復活が始まったと描く部分である。これは、実際に起こったことの描写というよりも、「マタイ福音書」の復活神学に関する立場(終末の復活は主イエスの十字架によってすでに始まった)を示すものであろう。

来週の誕生日 (3月28日~4月3日)**主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-307 番「ダビデの子、ホサナ」は、スウェーデン語聖書のマタイ 21:9 の聖句に、18 世紀末スウェーデン国王の招きで活動したドイツ人音楽家フォクラーが作曲。スウェーデンおよびフィンランドの福音ルーテル教会讃美歌集で 1 番に収められた待降節第 1 主日用の讃美歌。フィンランド語版からこども讃美歌に採用され、棕櫚の主日の聖句であることに即して受難節ことに棕櫚の主日用の讃美歌として採用。
- ・21-315 番「茨の冠かぶせられ」は、1983 年出版『こどもさんびか2』の編纂にあたって公募され採用された讃美歌。作詞者桃井綾子は夫と共に牧師として

教会や幼稚園に仕え、キリスト教教育関係の働きにあたってきた。作曲家山元富雄は、トロンボーン奏者としてオーケストラで活動する傍ら作曲、編曲にも携わってきた。

- ・21-311 番「血しおしたたる」(= I 136 番)は、12 世紀フランスの神秘思想家クレルヴォーのベルナルドゥスの弟子であるシトー会修道士アルヌルフ・フォン・レーヴェンのラテン詩に基づいて、17 世紀ドイツを代表する讃美歌作家 P. ゲルハルトが作詞。曲は、ルター派の作曲家ハンス・レオ・ハスラーが恋愛歌「わが心は千々に乱れ」として作曲した旋律で、1613 年出版のコラール集「聖なる調和」に「心より憧れ望む」の曲として採用されていたものが、1656 年出版の讃美歌集「歌による敬虔の訓練」でゲルハルトの歌詞と結びつけられた。原曲は 21-310 番のリズムだったが、「血しおしたたる」と結びつけられるまでに 21-311 番のリズムに改変された。バッハの「マタイ受難曲」等で使用されている。

21-307「ダビデの子、ホサナ」**Hoosianna, Daavidin Poika****21-311「血しおしたたる」****O Haupt voll Blut und Wunden**

1. O Haupt voll Blut und Wunden, / voll Schmerz und voller Hohn, / o Haupt, zum Spott gebunden / mit einer Dornenkron, o Haupt, / sonst schön gezieret / mit höchster Ehr und Zier, / jetzt aber hoch schimpfieret: / begrüßet seist du mir!
2. Du edles Angesichte, / davor sonst schrickt / und scheut das große Weltgewichte: / wie bist du so bespeit, / wie bist du so erleichtet! / Wer hat dein Augenlicht, / dem sonst kein Licht nicht gleicht, / so schändlich zugericht?
3. Nun, was du, Herr, erduldet, / ist alles meine Last; / ich hab es selbst verschuldet, / was du getragen hast. / Schau her, hier steh ich Armer, / der Zorn verdient hat. / Gib mir, o mein Erbarmer, / den Anblick deiner Gnad.
4. Erkenne mich, mein Hüter, / mein Hirte, nimm mich an. / Von dir, Quell aller Güter, / ist mir viel Guts getan; / dein Mund hat mich gelabet / mit Milch und süßer Kost, / dein Geist hat mich begabet / mit mancher Himmelslust.
5. Ich will hier bei dir stehen, / verachte mich doch nicht; / von dir will ich nicht gehen, / wenn dir dein Herze bricht; / wenn dein Haupt wird erblassen / im letzten Todesstoß, / alsdann will ich dich fassen / in meinem Arm und Schoß.
6. Es dient zu meinen Freuden / und tut mir herzlich wohl, / wenn ich in deinem Leiden, / mein Heil, mich finden soll. / Ach möcht ich, o mein Leben, / an deinem Kreuze hier / mein Leben von mir geben, / wie wohl geschähe mir!
7. Ich danke dir von Herzen, / o Jesu, liebster Freund, / für deines Todes Schmerzen, / da du's so gut gemeint. / Ach gib, dass ich mich halte / zu dir und deiner Treu / und, wenn ich einst erkalte, / in dir mein Ende sei.
8. Wenn ich einmal soll scheiden, / so scheide nicht von mir, / wenn ich den Tod soll leiden, / so tritt du dann herfür; / wenn mir am allerbängsten / wird um das Herze sein, / so reiß mich aus den Ängsten / kraft deiner Angst und Pein.
9. Erscheine mir zum Schilde, / zum Trost in meinem Tod, / und lass mich sehn dein Bilde / in deiner Kreuzesnot. / Da will ich nach dir blicken, / da will ich glaubensvoll / dich fest an mein Herz drücken. / Wer so stirbt, der stirbt wohl.